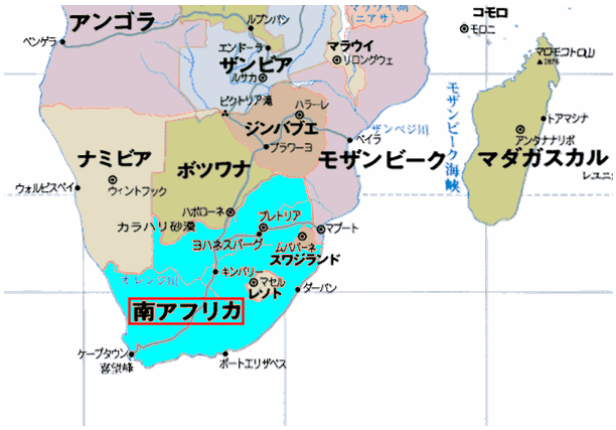
南アフリカ共和国　　派遣期間　2014年４月～2017年３月

ヨハネスブルグ日本人学校　実践報告

北見市立美山小学校
教　諭　　大垣　正紀

1　南アフリカ共和国について

在外派遣教員として平成２６年４月にヨハネスブルグ日本人学校に着任した。ヨハネスブルグ郊外のORタンボ国際空港（ORタンボとはアパルトヘイト時代にネルソン・マンデラ氏とともに闘争の英雄であるオリバー・タンボ氏の名前）に，当時の校長先生や職員の方々が日本と南アフリカの国旗を振って出迎えていただいたときの光景は今でも目に焼き付いている。



アフリカのイメージといえば灼熱の大地。しかし季である６月から８月になるとヨハネスブルグの朝晩は１０℃を下回り家の中では暖房から離れられない冬の寒い日々が続く。アフリカ大陸の最南端，南緯22度から33度に位置しており，南極の近さを感じる一面である。総面積は１１２万３２２６㎢で日本の倍以上，中央には標高３０００ｍを越えるドラケンスバーグ山脈や，北西部には広大なカラハリ砂漠が広がっている。

総人口は約５０００万人。移民やイギリスによる植民地化などの歴史を繰り返した南アフリカは多民族国家である。その中で大多数を占めるのがアフリカ系黒人。その黒人も複数の部族に分かれている。ヨーロッパ系白人などの移住民族，カラードと呼ばれる混血人種，そしてアジア系などで構成されている。

2　ヨハネスブルグ日本人学校の特色

ヨハネスブルグ日本人学校の最大の特色は，防犯対策および指導の徹底である。ヨハネスブルグは治安情勢が非常に悪いため，通常時より電子フェンスと常駐警備員（６名）で防衛している。また，道路を歩くこともできないため，多くの家庭ではスクールバスにて自宅の前まで迎えに行って登下校を行い，スクールバスを利用しない家庭は保護者が直接送り迎えを行っている。ゲートでは毎年作り替えているゲートパスを提示した者のみ入校できる。ゲートパスを所持していない者は，パスポートもしくは写真入りの身分証明書を提示して初めて入校が許させる。停電時は，電子フェ

ンスへの電力供給に不安があるため休校の措置をとっている（H28 年度１回　H27 年度３回，H26 年度２回）。

ヨハネスブルグ日本人学校では２か月に一度は避難訓練を行う。これは日本の学校と比べても多い回数である。その中でも火災などの自然災害の他に，避難訓練は毎年バスジャック訓練や暴動対策の訓練を行っている。海外ではスクールバスで通う最中や授業中にも考えられる突発的な事件に対応し，自分の身を守らなくてはいけない。学校の警備員の方々が扮する犯人役は実際を想定し，たとえ訓練とわかっていても迫力のある演技。自然と緊張感のある真剣な訓練が行われている。危険が常に隣り合わせであるとうことは海外で生活する日本人として意識するとともに，児童生徒への指導意識も高くもって生活していかなくてはいけない。

さらに，ここ数年来 ISIL 等により日本人を標的としたテロの危険性が高まっていることを受け，日本人学校の警備強化が重要という認識のもと，在南ア日本大使館より南ア政府及び警察に学校周辺の警備強化を要請があった。そのため学校運営委員会との協議し，長期的視点に基づいた安全対策実施スケジュールの計画を立てた。

⑴　バスハイジャック訓練

日々利用しているスクールバスを使ったバスハイジャックを想定し，セキュリティー会社より犯人役を雇い訓練を実施する。大使館の安全警備対策官に訓練の様子を見ていただき課題を教えていただき，どのように行動するのがよりよいのか実際に体験したりする。

有事を想定した訓練に子供たちは真剣そのもの

⑵　避難訓練

・暴動が起きた際の避難の仕方（授業中）
・不審者が入ってきた際の避難の仕方（授業中）
・火災が起きた際の避難の仕方（授業中）
・不審者が入ってきた際の避難の仕方（休み時間中）

※毎回大使館より安全警備対策官に来ていただき，ヨハネスブルグの近郊の子供が巻き込まれる犯罪や避難の仕方の課題を教えていただく。

⑶　安全点検

・毎月担当箇所を点検し，施設に不具合がないか調べる。

⑷　携帯電話・教室等の鍵の常時携帯

・非常事態に備え，万が一の際に，常に連絡が取れるように携帯電話を常に持ち，また日本のようにすべてのドアが開くマスターキーは存在しないので，すべての教室および特別教室等の鍵２０本程度を常に持ち歩く。

⑸　長期的展望の視点に沿った計画

【2016 年】

・放送設備の充実

改修緊急時に放送室からしか放送できないため，職員室などから緊急放送を行うために放送設備の改修をする。またその際に職員同士の連絡系統としてパーソナル無線機の導入を図る。

・自家発電機の導入

【2017 年】

・自家発電機のメンテナンス。

・パニックボタン 作動確認・及び電池の交換

【2018 年】

・電子フェンス バッテリー交換

停電時にすぐにバッテリーに切り替わるが，1 度使う毎に 10％程度，使用時間が下がる。購入時満充電で８時間。昨年度交換したが，すでに今年度 10 回以上使用したため。

【2022 年】

・電子フェンス 改修

設置より 20 年が経過したため，電子フェンスの大幅改修。

3　国際理解教育の実践

⑴　国際性豊かな子どもの育成を目指して

日本人学校の保護者の多くは日本とは大きく異なる海外の環境の中で，教育のあり方に関して非常に高い関心を示している。しかも塾や進学教室などがない学習環境の中で，いかにして学力の向上を図るのか等，学校に対する期待は非常に大きい。

ヨハネスブルグ日本人学校では，文科省が示している小中学校の標準授業時数よりも多く時数を配当している総合的な学習の時間等で，現地理解や国際理解教育に視点を当てるとともに，コミュニケーションのための「英会話（EC）」を実施し，英語圏にある日本人学校として保護者の要望にもかなうよう英語力の向上に努力している。また文科省の提唱している「英語が使える日本人の育成」を重視し，小学校から英会話を取り入れ，このことを通して現地との交流を深めるなど実践化も図ってきた。

文部科学省や外務省及び日本の企業各社は，海外においても日本国内の義務教育に相当する教育を学齢期の子供たちに受けさせるため，日本人学校や補習授業校等で学んでいる児童生徒を支援している。なぜなら在外教育施設は，海外という日本とは異なる環境の中で設置されているので，当然のことながら国際性を培うことが期待されているからである。

その国の言語によるコミュニケーション能力があることや，異なる文化や習慣等に柔軟に対応できること，あるいは，人種，民族に対する差別や先入観を持たないで互いに協力できること等である。

ヨハネスブルグ日本人学校では日本の義務教育を前提に，確かな学力を身に付けることと国際性の涵養については教育の目的の一つであり取組むべき課題の一つと押さえている。

⑵　交流学習の意義

日本人学校に通う子供たちが南アフリカにいて南アフリカを知らず，南アフリカの子供と交流することもなくヨハネスブルグ日本人学校での教育体験を終えてしまったら，それは現地理解教育，国際理解教育を実践したことにはならない。

日本人学校では，現地教育機関や施設等との交流を図ってきた。３年間，現地小中学校の他，幼稚園は高等学校そして孤児院や介護老人施設等含め，幅広い年齢層との交流を図りながら，現地理解力及びコミュニケーション力の育成を目指している。

この交流学習は「国際理解教育を通しての国際感覚・人権意識の醸成」及び「コミュニケーション能力の育成」は極めて大きな意義がある。その中で，現地の子供と接する機会を通じて，南アフリカ共和国を理解する貴重な機会と捉えている。

常に子供たちの安全管理を念頭に置きながらも在外教育施設としての特色や小規模・少人数という特色を生かし，何をすべきか・何ができるかを派遣教員一丸となって智恵を出し合い，保護者の要求を受けとめながら，教育の本質を忘れることなく海外で暮らす子供たちのための教育指導を実践していくべきであると考えた。

⑶　オルランド孤児院との交流学習

ソウェト地区にあるOrlando（オルランド）孤児院との関わりは，日本人学校として大変意義深い教育活動であった。このオルランド孤児院と日本人学校は１０年以上の交流を続けている。平成２８年度，ヨハネスブルグ日本人学校は創立５０周年の佳節を迎えた。記念式典には来賓として孤児院の院長であるソラニ・ミリアム・マジブコ院長にお越しいただいている。

孤児院のあるSoweto（ソウェト）地区は，アパルトヘイト時代に白人により黒人隔離政策地域として区画された地域である。地名の由来は，″South Western Townships″の短縮名であり，迫害されたアフリカ系住民の象徴の地でもある。

孤児院は１９４０年に設立され，１歳未満から１５歳以上の子供たちが常時５０名以上，多いときには１００名近く生活している。この孤児院で生活する子供の８５％は親が育児放棄，１５％は親がエイズ等で亡くなった子供たちである。この現実だけを捉えると悲観的になりがちだが，実際に子供たちとふれあう中で見られる目の輝きや喜びを体いっぱいに表現する姿に私自身が励まされ，この子供たちのこれからの幸せを願わずにはいられない気持ちになった。

私は交流学習や職員研修も含めて６回訪問させていただいたが，マジブコ院長はいつも笑顔で出迎えてくれた。施設はとても近代的である。一部施設の壁には，日本の現代美術家である日比野克彦氏が孤児院を描いた壁画があり，訪れる度に目を奪われた。

交流内容は低学年UNITと高学年UNITに分かれて行う。日本人学校の子供たちは折り紙やお手玉，福笑いにカルタなど手作りで準備したものを紹介しながら交流した。

体いっぱい喜びを表現する子供たち

在任中，趣向を凝らして「運動会」を行った。この国に競技としてのスポーツ大会はあるが日本的な運動会はない。玉入れ，綱引き，二人三脚など，この国の子供たちにとっては初めて経験するものばかりである。慣れない動作に戸惑いながらも次第にヒートアップし始め，日本の子供たち以上に盛り上

がる様子が見られた。勝つとバック転をするなど体全身で喜びを表現し，負けると悔しくて勝つまで続けるオルランドの子供たちであった。最後は毎年，日本人学校の子どもたちによる「ヨハネスソーラン」を披露した。

最初は静かに見ていたオルランドの子供たちも，やがて踊りたくてそわそわし始めた。「Let's dance together!」と呼びかけると一斉に飛び出す子供たちである。その中で，日本人学校の子供たちが教えてあげる光景からも交流学習の意義を感じた。

そして交流学習はそれでは終わらなかった。踊りへの御礼として，オルランドの子供たちが現地のダンスを披露してくれた。手拍子をしながら床を踏みリズミカルに踊る様子は，さすがとしか言いようがないくらい素晴らしいものであった。私自身，オルランドの子供たちとの出会いは決して忘れることはないだろう。

⑷　交流学習の成果

多種多様な世代との交流する中で，子供たちは言葉が通じず戸惑う様子も見られたが“遊び”という最大のコミュニケーションツールを用いて積極的に関わることができた。そのがんばりに応えるかのように，関わった現地の人々も目を輝かせながら施設内を連れまわったり，遊びを教えてくれたりとよりよい関わりを築くことができたと思う。

交流後の振り返りでは「自分から寄り添うことができたか。」と「交流相手はどんな場面で笑顔を見せてくれたか。」の２つの視点にそって話し合った。「どんなときに交流相手は笑顔になってくれましたか。」の質問に笑顔の花がいっぱい咲いていた。その中で一人の子供の，「自分が笑顔でいれば，相手も笑顔になってくれた。」という気付きに注目した。実は，この子が大切にした態度こそ，もっとも相手を笑顔にさせるための１つの秘訣であることを仲間に伝えた。さらに，これは，普段の生活の中で友達との関わりにおいても大事にしたいことである。このように，交流学習を繰り返すごとに，よりよい関わりに気付くことができるようになった子供である。

日本人学校の子供たちは週４時間，現地採用教員による英会話の授業を通して語学力を身に付けてはいるが，笑顔で寄り添える資質が何より大切である。異なった学年や生活環境にいる子供たちと交流をしてきた。子供たちは肌の色や髪の毛の色，言葉の壁があったとしても笑顔になる理由に違いはないということを理解し，よりよく関われることを知った。ここで学んだことをこれからの生活の中で生かしながら自分を，そして仲間を大切にできるようになってもらいたい。

⑸　アパルトヘイトを学ぶ　小学部４年　社会科【郷土の歴史】道徳【国際理解・国際貢献】

南アフリカでは，4月27日はFreedom dayという祝日である。理由は，アパルトヘイト制度が終焉し，1994年4月27日に全民族参加による民主的な選挙が実施され，ネルソン・マンデラが率いる政党ANC（アフリカ民族会議）が第１党となって，マンデラ氏が大統領に就任し，新生南アフリカ共和国の政府が誕生した記念日だからである。

アパルトヘイトの歴史を学ぶ施設は，このヨハネスブルグ市内

にも多く点在している。治安の関係上全てを周ることは難しいが，

「アパルトヘイトミュージアム」や「ヘクターピーターソンミュージアム」などは，観光ツアーも組まれており比較的訪れやすい場所である。この２つの施設については職員で校外研修として数回訪れている。

また，ヨハネスブルグ日本人学校では南アフリカを学ぶことを目的とした副読本「大地から学ぶ」を発刊している。これまで歴代教員により改定されてきたが，平成２８年度，日本人学校が創立５０周年を迎えるにあたり１０年ぶりに改定を行った。ここには南アフリカの自然から歴史，産業，そして文化等全てが網羅されており教科指導計画にも位置付けて教科指導に活用している。そこで４年生・社会科学習「地域の歴史にふれよう」の一環として，この副読本を活用しアパルトヘイトについての学習をした。

首都プレトリア・ユニオンビル前に立つマンデラ像

４年生としてはやや難しい内容であったが，前段でも述べたように，南アフリカで生活する子供たちが南アフリカのことを知らないのでは現地理解教育を実践したことにはならないと考え指導に努めた。

【学習の流れ】

①南アフリカのイメージを考える

②アパルトヘイトのイメージを捉える

③アパルトヘイトを学ぶ　※日本人学校作成の副読本「大地から学ぶ」を中心教材として活用

④黒人と白人の立場からアパルトヘイトを捉える

⑤マンデラ大統領の思いや願いを学ぶ

⑥アパルトヘイトに対する自分なりの考えをまとめる

本校が５０周年を迎えるにあたり，今から３０年以上前に在籍されていた方々をお迎えして講演会をしたときも，「その頃は，エレクトリックフェンスもなく，隣の公園まで歩いていってザリガニ捕りをしていた。」との話に子供たちは驚いていた。

白人視点から捉えるとアパルトヘイトも決して悪いことではないとなった。そこで，次に黒人視点から考えることにしてソウェト（アパルトヘイト政策によって迫害されたアフリカ系住民の象徴の地）についての映像や，ソウェト蜂起　（1976 年 6 月 16 日，学校におけるアフリカーンス語教育の導入に反発しアフリカ系学生を中心に抗議デモを行ったが，警官隊による鎮圧で当時 13 歳のヘクター・ピーターソンを含む多くの学生が死亡した。アパルトヘイトへの反発が国内のみならず世界に広がると同時にソウェトの名も一躍世界に知れ渡ることとなった出来事）についての資料を読み深めた。

【子供の思考】

・今後この国が黒人や白人関係なく話し過ごせる平和な国になると思うと嬉しかっただろな。

・マンデラさんは，この国を「虹の国」と言っていたが，虹にはいろいろな色がある。きっと「肌
の色は関係なく一緒にいれる」と考えたのだと思う。
・黒人と白人は一緒に関わり合える。明るい国にしようと「虹の国」と呼びかけた。自分が絶対
平和な国づくりをするぞという強い意志が伝わってくる。
・雨の日がやっと晴れて虹がでた。国民の気持ちが良く伝わった。
・アパルトヘイトが撤廃されて，みんなが平等でなくてはいけない。
・アパルトヘイトがなくなって，みんなが自由に暮らせる楽園を作りたい。悪いことが良いこと
になってほしい。
・いろいろなことを乗り越えて平和をもたらす国ということから「虹の国」と呼んだのだろう。

現地の友人の中には「アパルトヘイト時代の方が安全で暮らしやすかった。」と言う人もいる。アパルトヘイトが撤廃されて２０年以上が経過し，BRICS （2000 年代以降著しい経済発展を遂げている新興国の総称）としても発展を続けているこの国がマンデラ大統領の目指した国に向かっているのかどうか見守り続けていきたい。

⑹ 巡回指導

１年間に２回実施。場所は南アフリカ国内のダーバンとプレトリアにて実施。国内で居住環境により日本の教育を受けることが困難な子ども達に対して指導をすることを目的として計画，実施している。現地校が休業日の３日間で実施。日本人学校教員は２年間で２回の指導にあたっている。

指導の重点は国語，算数（数学）において，「読み・書き・計算」を中心としながら基礎，基本的内容の定着を図り，さらに学び方を身に付けさせることである。特に国語科おける言語指導（言語領域・漢字指導）の徹底と表現方法（書くこと・話すこと）への保護者要望は強い。また学習指導の他に，教育相談として，児童生徒及び保護者との面談を行い，一人一人の成果と課題や，家庭学習の仕方等の助言を行った。巡回指導への期待は大きく，短期ではあるが粘密な指導計画が必要であった。

次の示すものは平成２７年にダーバンで行った度巡回指導報告書の内容である。

【児童生徒の学習状況等】

今回参加した児童生徒は，小学２年生から中学３年生まで合計７名であった。彼らを教員２名で分担した。私が担当した児童は，小学校２年生１名，３年生２名，４年生１名の計４名であった。

児童は全員現地校に在籍し，普段は南アフリカの教育課程に基づいた授業を受けている。授業は英語で行われているが，どの子も英語力に優れており現地の児童とともに学び合うことができている。

児童生徒の主な学習教材は，南アフリカ共和国日本国大使館から受け取った教科書や，日本から取り寄せた問題集等である。家庭での学習状況としては，漢字や計算のスキルアップ学習が中心である。独学もしくは保護者の指導によって進められている。保護者は，日本の同学年児童と比較して進度が遅れていることを気にしていた。

国語と算数についての基礎学力は，日本の同学年児童と比較して，さほど遅れているとは感じな

かった。ただし，日本文を読み取る力については，やや個人差があり国語では物語の表現力や算数の文章問題を理解することについて，継続した指導が必要とも感じた。また，国語・算数以外の教科に関しては，ほとんど未履修の状況であった。

さらに，今回は父親が外国籍で，日本語ができない児童の参加があり，指導の際は母親が側についていただき学習内容を英語で伝える配慮もしている。

【教育指導の目標】

・日本の教育文化に触れる機会を設けることにより，望ましい学び方や態度などを身に付けさせ，日本の教育課程での学習内容を身に付けようとする意欲を高める。
・国語の「書く力」を育成し，指導期間内で作文を完成できるようにする。
・国語・算数の基礎基本を理解できるようにする。

【基本目標「目指す児童像」】

・日本の教育課程での学習内容を身に付けようとする意欲を強くもつ。
・課題に対して最後までやり遂げることができる。
・学習内容と方法を理解し，自主学習をしようとすることができる。

【指導計画の概要】

・児童の実態，および保護者の要望を考慮し，複数人数の良さを活かした教育指導を計画および実施。

【指導の方法と実際】

国語については，日本の学校で行われている一斉授業を体験するために共通教材を準備した。新美南吉の「ごんぎつね」を読み味わいながら，場面のあらすじを読み取ることにした。その際は，主人公を「ごんぎつね」の視点から，場面の要旨をまとめた。「ごんぎつね」の行動から，その他の登場人物との関わりを通して，「ごんぎつね」の気持ちの変容を自分なりに捉え，意見交流を図った。個々の考えの良さについて，教師が認めながら全員で共通理解を図ることで，全員がこの物語の良さを感じ取ることができた。また，特徴ある言葉にもふれながら，日本文学作品の良さを味わえるような手立ても取った。この学習のまとめとしての感想文を書くことを通して，原稿用紙の書き方についても理解を図った。内容については，学習でまとめた場面ごとの要旨を振り返りながら，心に残った場面について理由も添えて表現することにした。日本語のできない児童については英作文でまとめている。

算数は各学年の系統を考慮して，数と計算の分野に絞り，かけ算からわり算の概念および計算の仕方についての指導に努めた。九九は全児童が理解できていたこともあり，桁数が大きくなっても混乱もなく理解することができていた。ただし筆算は現地教育で実施されている仕方との違いもあり丁寧な指導に努めた。また，わり算を実施する際，同じ数ずつ分けるということを等分であると押さえ，持参した紙テープを同じ長さで切り取る具体的操作を取り入れながら理解に努めている。また，宿題としては，日本の学力検査や数学的リテラシー育成の内容に照らし合わせたものを用意して取り組ませている。

また今回，保護者の強い要望もあり，日本の都道府県の名前や特徴を捉える学習を行った。プリ

ントの他，カルタやパズル，インターネット教材を活用しゲーム的要素を取り入れたことで，児童も楽しみながら学ぶことを目指している。

参加した児童生徒は，全員，学習に対する意欲が高く熱心に取り組む様子が見られた。今回，保護者宅を会場としたが，インターネット環境等，十分な学習環境を整えてくださり，効果的に指導をすることができた。学習プリントの準備や予習に多くの時間を割いたが，彼らの「学びたい」という意欲に報われたと感じる。今回の指導内容を，日常の指導改善に活かしながら，研修を重ねていきたい。

4　ヨハネスブルグの生活

カールトンセンタービルからタウンシップを望む

⑴　安全に暮らすために

ヨハネスブルグのイメージはインターネット上にも見られる「世界一危険な都市」。しかし，３年間をここで過ごした私にとっては，アフリカで一番の経済大国としての活気，多くの人々のエネルギーで満ち溢れた街である。実際，他の地域の人もヨハネスブルグの黒人は生き生きしていると感じるらしい。

実際に暮らすと「世界一」というのはいい過ぎのようにも感じられる。しかし油断すると犯罪に巻き込まれてしまうのも現実である。私たち派遣教員を含め多くの邦人が住むのはコンプレックス型住宅である。広い敷地の中に一戸建てやアパート様式の住宅が立ち並び，芝の広場やプールなどの施設もあり，ジョギングやガーデンパーティーなどもして自由に過ごすことができる。しかし，広い敷地を取り囲む壁にはエレクトリックフェンスが張り巡らされ，ゲートには２４時間セキュリティーが警備している。コンプレックスの外は例えすぐ隣であっても歩いて外出することはない。

自家用車での移動が必須である。エレクトリックフェンスだらけの街に，来た当初は威圧感と物々しさを感じたものである。

⑵　暮らしやすい街

一方で安全面に気をつければヨハネスブルグでの生活はとても快適である。高速道路が張り巡らされるなど，インフラも整備されている。生活圏内には大型商業施設が数多くあり買い物や食事の他，多様なレジャー施設も充実している。海外で生活では，日本との環境の違いにより少なからずストレスを感じることもある。そこで，余暇をしっかり過ごすことも海外生活では大切なことである。この国では日本にいた頃よりも趣味の活動が増え，家族と共に様々なことをして余暇を過ごすなど，楽しむ時間が大幅に増えた。

⑶　人と時間のゆとり

クラスター住人との交流

南アフリカの人々はとても心と時間にゆとりが感じられる。道行く人，お店の人は必ずと言っていいほど挨拶や簡単な会話を交わして来る。もちろん知らない者同士だとしても，とてもフレンドリーな性格である。今や「知らない人とは話さないこと」が通り，公園でも街中でも黙々とスマホを見つめながらとにかく何かに急いでいる日本の光景を考えると新鮮に感じる一面である。

会話は基本英語だが，英語の他，アフリカーンス（オランダ語から派生した言語であり１７世紀にオランダ系白人（アフリカーナ）が南アフリカに入植した際，用いられていた言語が南アフリカ共和国全土に広く普及した）の他，各種部族の言葉も含め全部で１１もの公用語がある。これも南アフリカの特色と言えよう。日本人学校の現地職員も複数の部族出身者に分かれている。そこで相手の言語で挨拶をすると更にフレンドリーになってくれる。また，交通違反で止められた知人が現地の言葉で話せたことにより「いい人だ。」と許してもらえたこともあるほどである。

⑷　動物保護区

ゲームドライブ中にサイの親子と遭遇

アフリカの大きなイメージである大自然を感じたければ，車で２，３時間程走ると国立公園や自然動物保護区に行くことができる。特に有名なのが南アフリカ北東部に広がる『クルーガー国立公園（Kruger National Park）』である。ほぼ四国と同じ面積という広さで，全部を周るには１週間では足りないくらい広大な地域である。その中では車で移動しながら生息している動物たちの生態を間近に見ることができる。特に「ビッグファイブ」と呼ばれる，ゾウ，ライオン，ヒョウ，サイ，バッファローはなかなかお目にかかれない動物たちである。しかし，このクルーガーでは高い確率で出会うことができる。日本の動物園とは違い，ここでは「人間が主」で見て回るのではなく，動物の世界を“のぞかせてもらう”といった方が適切に感じる場所である。動物園では味わえない野生動物たちの生き生きとした営みに触れることができると同時に，人間の都合で動物の世界を壊してはいけないことも痛感させられる場所である。

⑸　ラグビー大国に興奮

２０１５年のラグビーの世界大会での日本代表の活躍は今でも脳裏に焼き付いている。日本でも大いに盛り上がったが，ここ南アフリカでも多くの日本人が日本代表の活躍に胸を熱くして応援していた。ラグビーは南アフリカ国内でも最も人気のある国民的なスポーツである。世界大会

期間中，国の代表チーム（通称：スプリングボック）の旗が街中で振られ，至るところにある大型スクリーン前では人々が歓声を上げるなど，国中が盛り上がっていた。

アパルトヘイト時代（１９４０年代から約５０年間続いた白人と有色人種とを差別する人種隔離政策）には白人しかできないスポーツであったがネルソン・マンデラ氏らにより多民族が団結する象徴としてのスポーツへと変化し愛されるスポーツとなった。南ア代表の他，ニュージーランド代表（通称：オールブラックス）などが定期的に来南するほか，国内でもプロチームのリーグ戦（世界スーパーリーグ）が行われている。昨年からは日本チーム（サン・ウルブズ）が参戦するなど，こちらの日本人の間でもラグビー人気が高まってきている。

⑹　ベアフッド（裸足）の街

冬でも裸足でトライを目指す

この国では，３月から９月までがラグビーシーズンである。私の息子も地元のラグビークラブに加入し，現地の子どもたちと共に夕方の５時半から７時くらいまで年齢別に分かれて練習をして交流を図った。その練習の特徴と言えば，子どもたち（１５歳まで）は靴を履かない「ベアフット」であるということである。練習が始まると，白人，黒人関係なく，子どもたちは靴を脱いでのラグビーである。

とにかくこの国はベアフットである。街角でサッカーに興じる子も裸足。初めはお金のない人が仕方なく裸足なのかと思ったら，大人も子どもも白人も黒人もなく，裸足の人がよく街を闊歩している（どちらかと言えば白人の裸足率が高い）。始めの頃はショッピングモールを裸足で歩く人々に驚いたものである。

⑺　ありがとう南アフリカ，ありがとうヨハネスブルグ日本人学校

３年間の派遣期間を終え，この国の良さを多く実感できたこと嬉しく感じる。日本人や南アフリカ人および多種多様な人々との関わりから多くのことを学ぶことができた。この国で出会えた全ての人々に感謝をしたい。今後，在外での研鑽を生かし尽力していきたい。そして日本から約１万４０００㎞離れた南アフリカの発展とそこに暮らす全ての人々の幸せを心から祈りたい。